

波佐見町中尾郷における窯業景観の構造とその歴史的価値

長崎大学工学部 学生会員 山邊 矢嗣

長崎大学大学院工学研究科 正会員 石橋 知也

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

周知のとおり、平成16年の文化財保護法の一部改正により重要文化的景観の選定制度が始まった。選定の条件は「地域における人々の生活又は生業および当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの」として8項目のいずれかに該当、もしくはそれらが複合した景観地であることとされる¹⁾。

波佐見町では鬼木郷の棚田風景を「水田・畑地などの農耕に関する景観地」に、中尾郷の集落を「鉱山・砕石場・工場群などの採掘・製造に関する景観地」にそれぞれ該当するとして、さらにこれらを複合した景観として重要文化的景観の選定をめざしている。後者の中尾郷は古くから窯業によって栄えた集落であり、今日まで多くの窯元が集まっている。

本研究では中尾郷における窯業景観の構造とその歴史的価値の顕在化させることを目的とする。また、鬼木郷と中尾郷を複合した景観地として選定するため、その関係性を明らかにすることも試みる。

1.2 研究方法

まず資料文献調査により、波佐見町をめぐる社会的背景の概要、窯業に関わる作業様式と施設を把握するとともに、過去の国土地理院地図・ゼンリン住宅地図から中尾郷とその周辺における道路・水路・公共空間の配置・整備の変遷を整理した。次にヒアリング調査により過去の窯業に関わる作業風景、住民の生活風景の確認をおこなった。その後、現地調査により景観構造の分析をおこなった。

2. 対象地の概要と社会的背景

2.1 波佐見町の概要

波佐見町は長崎県の中央部、佐賀県との県境に位置している。本研究の対象地である中尾郷はその南東部、盆地状の地形に形成された集落である。西は鬼木郷、東は三股郷、北は井石郷、南は嬉野市に接している。その始まりは1640(生保元)年に李裕慶と中尾庄右衛門がこの地で開窯した説が有力とされている²⁾。

2.2 波佐見焼の起源と社会的背景

波佐見焼をふくむ肥前地区の陶磁器の発展は文禄・慶長の役(1592~98年)後の朝鮮李朝から陶工が渡来したことが起源とされている³⁾。1590年頃から陶器生産をおこなっていた波佐見町でもこれ以降、磁器生産をおし進めていった。なかでも本研究の対象地をふくむ三股郷・中尾郷・永尾郷の三地区は「三皿山」と称し窯業地の起源とされ、以来継続して窯業がおこなわれてきた。しかし、波佐見焼はその流通経路から、江戸時代は積出港である伊万里港の名前をとり「伊万里焼」と、明治時代以降は積出駅である有田駅の名前をとり「有田焼」と称されてきたため⁴⁾、全国的に広く認知されることなく現在に至っている。

3. 作業様式とその変遷

3.1 波佐見焼の製造工程

波佐見焼の特徴は日用食器をメインに扱う大量生産であり、陶土・生地・石膏型製造、上絵付などが分業体制でおこなわれている。現在は各工程が独立・細分化しているが、創業時代の陶工たちはすべての工程を独力でこなっていた。文献調査から分化し始めたとされる時期を把握し、その変遷をまとめたものを図1に示す。分業化の理由として、ひとつは機械化による能力向上と作業の簡易化、もうひとつは大量生産に対応するための効率化とされている。

3.2 窯の構造と燃料の変遷

前項で示した分業化に加え、中尾郷では焼上げ合理化のための窯の構造とその燃料が移り変わってき

年代 職種	1881(明治14)~ 1890(明治23)頃	1890(明治23)~ 1945(昭和20)頃	1945(昭和20)~ 1955(昭和30)頃	1955(昭和30)~ 現在
鉱業所	原料	原料	原料	原料
製土業者		製土	製土	製土
型屋				石膏型作成
生地屋			成形	成形
窯元	製土 成形 乾燥 素焼 下絵付 施釉 本焼成 上絵付	成形 乾燥 素焼 下絵付 施釉 本焼成 上絵付	乾燥 素焼 下絵付 施釉 本焼成 上絵付	乾燥 素焼 下絵付 施釉 本焼成 上絵付

図1 作業工程の変遷

た. その変遷をまとめたものを図2に示す. このなかで雑木・赤松を燃料とする登窯と石炭を燃料とする炭窯は, 現在でもその痕跡を目にすることができる. 中尾郷における窯業景観の構造を分析するにあたり, この窯構造と燃料の変化が景観に与えた影響は大きいと考え, 代表的な年代を「登窯期」, 「登窯+炭窯期」, 「炭窯+重油窯期」, 「ガス窯期」と便宜的に仮定し, 年代ごとの整理をおこなった.

4. 景観構成要素の配置と変遷

資料文献調査と 80～95 歳の地元古老へのヒアリング調査をおこない, 作業場, 工作物, 道路, 公共空間の変遷をまとめたものが図3である.

「登窯期」に存在した要素として登窯とその屋根があげられる. この年代は窯が窯元の敷地外に位置しており, 各窯元が共同で作業をおこなっていた. また, 登窯周辺は窯業のほか, 子どものあそび場としても使われていたことから, 公共空間としての役割を担っていたとの証言が得られた. 道路に関しては, 舗装・幅員の変化はあるが, 現在もほぼ残っている.

「登窯+炭窯期」では新たに炭窯のレンガ煙突が要素として加わり, 煙がたちのぼる風景が現れ始める. 炭窯は独立した単窯であり, この年代から窯は窯元の敷地内に取り込まれることになる. 一方で 1942(昭和 17) 年頃に中尾下登窯が廃窯したことで, 以降, 登窯での作業はみられなくなる. また, この時期に現在の主要幹線道路が整備された.

「炭窯+重油窯期」では景観に大きな変化はなかったとの証言が得られた. また, この年代から分業体制が整い始め, 生地屋が増加, それにともない成形された器を窯元へ運送する風景が現れたとされている.

5. 中尾郷における景観の価値と今後の展開

中尾郷では登窯跡やレンガ煙突など, 異なる年代の窯業を支えてきた工作物が共存し, 現在の景観を形成している. 「登窯期」には, ほぼすべての工程を窯



図2 窯の構造と燃料の変遷



図3 構成要素の配置

元がおこない, 共同の作業空間を活用する, という風景が存在し, 「登窯+炭窯期」では, 窯が敷地内に取り込まれることで, そのような外部での作業風景が一部消失したと考えられる. さらに, 「炭窯+重油窯期」では分業化により, 各作業場を道路がつなぎ, 品物が行き交うように空間の使い方が変化している. この窯業を通じた人の営みと空間構成の変化, 並びに中尾郷における窯業の発展の歴史を説明するうえで, 登り窯跡や煙突, 道路などの要素は必要不可欠であると言える.

今後は, 鬼木郷との関係性の調査と合わせて, 登窯周辺以外の共同作業場の存在並びに, 道路・水路の変遷と窯業の関連性の調査を進める予定である.

参考文献

- 1) 文化庁文化財第二課:「文化的景観の保護のしくみ」, 文化庁, 2019
- 2) 波佐見史編集委員会:「波佐見史(上下巻)」, 波佐見町教育委員会, 1976, 1986
- 3) 波佐見焼振興局会:「長崎やきもの波佐見焼ハンドブック」, 2017
- 4) 波佐見 中尾山のあゆみ実行委員会:「波佐見 中尾山のあゆみ」, 2018